

1 老子との出会い

山鹿がはじめて「老子」を手にしたのは、一九二〇年（大正九）頃、秘密出版がばれて出版法違反で京都監獄に服役中、たまたま獄中備えつけの官本を閲覧して、と思われる。

本書の「序」や「老子と道教」で山鹿が解説するように、老子は先ず何にもまして、『国家と道徳と称する悪風に反対した人』であった。

そして山鹿にとっての「老子」は、まさに東洋的表現による「無政府主義の哲学」であり、「アナキズムの思想」であり、またアナキズムの在り方、アナキストの生き方を説いて、人民みずからの「救世済民」の方途を明らかにする、「革命書」であった。読めば読むほどそれは紛れもなく、アナキズムの主張そのものであった。

それゆえ獄中で「主義や運動に関することはもちろん、外界一切の情報から隔離されていた山鹿が—はからずも「老子」を手にしたときの驚喜と、それへの傾倒が、どれほどのものだったかは、およそ想像に余りあるといえるだろう。たとえば19才の4月、大杉栄と会いア

ナキズム運動への献身を決意したときを一回目とすれば、「老子」との出会い、山鹿自身のアナキズムをより深い省察にみちびき、一そう血肉化する二回目の転身というべきことであつた。

そしてまたアナキズムが、19世紀に出現し西欧から舶来した社会主義の一分脈にとどまらず、二千四百年前の中国古代にあらわれて、洋の古今東西を貫く「万人の道」という、山鹿の確信になるとともに、エスペランティスト・アナキスト山鹿の何よりもの役割—老子をエス訳してひろく欧米の同志たちに伝えること—を思い立ったのもまた当然のことだった。そして、すこぶる難解、しかも「和訓読み」にも異同が多々あって、容易に定めにくいといった困難に何度か中絶しながら、長い年月をかけてやっと果すことになるのである。

☆

☆

☆

—ここで、ほんのちょっと老子の思想の特徴をあげてみると、たとえば—

第一章の冒頭から「常道ハ道ニアラズ」「常名ハ名ニアラズ」といい、第二章も「美コレ悪ナルノミ」「善コレ不善ナルノミ」、第三章では、「賢ハ争イノモト」「財貨ハ盗ミノモト」というふうな「老子」は、既成道徳や固定観念の全否定、つまりおよそ世間一般で通用する常識や秩序と対立する断言ではじまる。

にもかかわらず老子注釈書の多くは、その本旨を換骨奪胎し、いかにもらしい道徳訓に意識するか、せいぜい意味を弱めた反語的警句としてしまっている—としかいいうほかない。

山鹿がその「ヤマガ老子」ともいふべきもので言おうとするのは、老子の真意をそのまま「直解」することに努めるならば——というよりも、人倫・良風美俗・秩序・道徳といったもの、国家・社会・家といった体制にとらわれている我々の日常にふと気付いたとたん、老子は、むしろそれらの全てを根本から覆す意識革命をこそ提示している——ということだった。

つまり、そのようにすべての既成概念を否定したその上で、「老子」はそもそも人間の在り方、生き方として、その根源にある存在としての「道」と「徳」を、改めて提起している。「老子」81章五千余字で伝えるものは、すべて「道」と「徳」から発して、みなそこへ戻るものといつてよいだろう。

そしてその「道」とは——「大虚無といふべきカオス」。「無間無明の大宇宙」。あるいは「万物創成の始母にして、玄のまた玄」であり、アナキズムなのである。

(注)「玄」を辞典でひくと——赤味を帯びた黒。または女陰を意味する、とある。

▲——谷神死せず、コレヲ玄牝(ゲンピ)トイウ——第六章。▲——天門開闔(カイコウ)シテヨク雌(シ)タランカ——第十章。▲——物アリテ混成シ天地ニ先ダツテ生ゼリ。寂タリ寥タリ。独立シテ改メズ周行シテアヤウカラズ。以テ天下ノ母タルベシ——第二章。その他28章52章など。(この世界観は重要だと思う)

2 エスペラントとの出会い

山鹿泰治(一八九二—一九七〇)の七八年の生涯は、エスペラントとアナキズムという、日本においてほとんど相前後して発足した二つの運動に、その草創期から絶えず関わることによって、希有のものだった。「山鹿泰治・人とその生涯」「年譜」などから、その要点を年代記風に抄出すると——

☆ ☆ ☆

▼ 一八九二年(明治25)6月26日。父山鹿善兵衛、母京の第12子として京都に生まれる。

(父は日本の活版印刷の開祖本木昌造の直弟子三人の一人として、東京—築地活版、大阪—大阪活版と並んで、京都—点林堂の創始者で、この国の印刷業の草分けである)

▼ 一九〇七年(明治40)15才。京都一中の学業を途中で放棄し、半ば家出の形で上京。知人中村有楽を頼って、出版業有楽社に住込む。

(有楽社支配人我孫子貞次郎は、前年6月22日発足した日本エスペラント協会(以下JEA)の創立者の一人で、JEA事務所も社内にあった)

▼ 有楽社に入社してすぐ開かれた社内エスペラント講習会でエスペラントを学ぶ。

(晩年の手記『たそがれ日記』によれば、『三回もやるうち、30人あまりが続々落伍して、私ひとりが残った。結局、講師の黒板勝美(東大史料編纂所をつくった我が国古文書学の権

威。JEA創立者、文博）さんが使用した「練習題集—Ekzerario」と、二葉亭四迷著の「世界語」で独り学ぶことになった。またその成行きで、JEAの無給書記として協会の雑用を引き受けることになった」とある）

▼一九一〇年（明治43）18才。有樂社が倒産。父とも縁故がある築地活版に転職する。

（JEA事務所も内幸町に借家をみつければ引越すことになり『一二月の寒い朝、協会の全財産——といっても机一つと外国から依託された辞書や本・印刷物など荷車一台に軽く積んで、ひとりで挽いていった。六畳と三畳の間を事務所にし、私はその三畳の隅に寝泊まりした。

毎月二回の例会には、いつも五・六人あつまった。小坂狷二さんはまだ一高生だった。

私はJEAの機関誌（日本エスペランティスト）を印刷させている築地活版へはいり、欧文植字見習工として働きました）

3 アナキズムとの出会い

▼一九一一年（明治44）3月、19才。築地活版の同じ職場に入ってきた熟練工原田新太郎と知り会い、その手引で大杉栄と出会う。

（ちょうどJEAが発足した一九〇六年6月22日から6日おくれの28日、アメリカから帰国した幸徳秋水は、神田錦会館で帰朝報告会をひらき、「世界革命運動の潮流」と題して、その後の運動に大転換をもたらすことになった「直接行動論」を展開した。これが我が国で

はじめて「アナキズム」を主張した歴史的な第一声だった。

それから4年後の一九一〇年6月、幸徳らはいわゆる「大逆事件」をデッチ上げられ、わずか半年間の秘密裁判によって、一年一月刑死することになる。その幸徳宅へ出入りしたことがあり、とくに主犯として刑死した菅野スガと親しかった原田は、あやうく連累を免れ、身元ををかくして築地活版に入職したのだった。

『原田のすすめで大杉の住所へエス語で手紙を出すと、すぐ返事がきた。次の日曜日、指定の三越の待合室へいった。縞のセビロを着て、大きな目玉をギョロつかせてやってきた大杉は、私がエスペランティストで印刷工だと自己紹介すると、「西洋でも印刷工が革命の先頭に立っている。世界の労働者が団結するためにエスペラントは最も有力な武器だ」と大いにあげましてくれた。

その夜私はねどこの中で何ども起き上り、自分のえらんだ道を、いよいよ進むことを深く決意した』

—それにしても大逆事件後の大弾圧の嵐が吹き荒れるさなか、運動が表面から全く消えみんなが息をひそめ身をかくして、のちに歴史家が「冬の時代」と名付けたこのときに、なお山鹿を手引した原田のような存在があり、また千葉監獄に二年半服役して（その為に連座を免れた）出獄直後の大杉が、手紙一本で初対面の山鹿のために、尾行をまいて出てきたということなど、まさに運命的な出会いといえるだろう。そしてこの運命がみちびくまに、エスペラントとアナキズムを一体不可分のものとした、山鹿の生涯がいよいよはじまる—）

▼ 一九一二年（大正元）20才。尾行や監視で身動きならず、大杉のすすめで京都へ帰る。奥村電気商会につとめ、電気技術習得。

▼ 一九一三年（大2）21才。満州へ。満鉄大連発電所、電気試験所試験係。北京官話習得。

4 師復・大杉・エロシエンコなど

▼ 一九一四年（大3）3月、22才。大杉からの手紙により「上海」に潜行。「師復」の地下印刷所で「民声」発行を助ける。

（『この民声秘密印刷所の印刷機は、広東—マカオと官憲に追われながら持ってきた六頁手動ロール機一台で、エス語と漢字の活字が完全にそろっていた。「民声」は週刊で四六版32頁、半分は漢字半分はエス文、写真版も入っていた。

民声社のメンバーは、師復の妹ムツテの外若い女性が七人、男が十人だったが、何分毎週原稿をつくり、編集、組版、印刷、製本、発送の一切をやるのだから、師復の働きは超人的なものであった。：私は早速その日から、エス文欄の組みを手伝いはじめた』）

▼ 同年10月。大杉から「近代思想」を廃刊し、いよいよ運動紙「平民新聞（第三次）」を発刊する—との来信。師復と相談のうえ急ぎ帰国。

（ところがその平民新聞は、一号から立てつづけの発禁・没収つづきで遂に6号で廃刊。大杉は家財全部を売り払ったあげく、大借金を背負い込んで身動きできなくなった）

▼ 一九一五年（大4）23才。大杉宅に相坂信と居候。神楽坂路上で古本屋。クロポトキン著「青年に訴う」を出版案内風のパンフにして秘密配付。福田国太郎・相坂とアナ・エスグループをつくって海外通信。

（そのころエロシエンコが来日、沈滞していたエスペラント運動も、やや活気を取り戻してきた—

『銀座のカフェーで月二回例会が開かれるようになり、その常連は、小坂猪二・千布利雄・福田・山鹿。ときどきが黒板・田鎖綱紀（速記術発明者）・中村精男（気象台長）とエロシエンコだった。彼は神近市子と仲がよく、彼女に伴われて大杉の「研究会」にもよく顔を出した。ロンドンでクロポトキンに逢ったときの話をエス語で講演したときは、福田の通訳だった）

5 黒板・北一輝・入獄

▼ 一九一六年（大5）1月。24才。大杉の逗子転居で、行き場所を失い、黒板宅へ転がり込む。

（黒板宅にJEA事務所がおかれていた。その事務係兼書生というわけだった）

▼ 同年6月。黒板宅を出て中国革命を支援している北一輝の食客になる。

（山鹿担当の尾行刑事秋葉は、近所の青山南町にすむ北一輝をも受け持っていて、よくそ

の噂話をした―

『ある日訪ねていくと、北はすっかりエスペラントに感心して、俺のところへ来い、と言った。折柄、中国の軍閥「譚人鳳」が、北を頼って資金つくりにきていたので、その護衛の名目で譚の借切った旅館でぶらぶらしながら、北の家へ毎日往来するようになった』

▼ 同年9月。刑事秋葉の仲人で北家で家事見習いをしていた娘ミカと結婚。同時に世話された職場―レコード針工場の一隅で新居をもつ。ミカ21才。

▼ 一九一七年(大6) 25才。2月兄慶藏の死により、ミカを連れて京都へ帰る。4月長兄桑次郎死去。東京を引揚げ、義姉を助けて家業の点林堂を手伝う。

▼ 一九一九年(大8年) 27才。1月27日。秘密出版(パンの略取梗概) (サンジカリズム) (平民の鐘) 印刷関係より発覚。早朝五条署の手入れ。出版法違反で求刑8年、判決3年。

▼ 一九二〇年(大9) 28才。京都監獄入獄中、封筒はりなどで能率をあげ、時間前読書、筆記具使用などの特典をうける。山鹿流のローマ字筆記体を工夫する。「老子」をよみ傾倒、そのエス訳を発起。

6 三どの渡支と「大杉死後」

▼ 一九二一年(大10) 29才。9月出獄。山科日の岡にかくれ住む。久板卯之助・和田久太郎ら西下東上の際立ちより、東上をうながす。

▼ 一九二二年(大11) 30才。6月山科を脱出し、東京本郷に偽名で住む。以降3年間警察は所在をつかめず、尾行なし。

▼ 同年7月。モスクワ帰りの吉田一に入露をすすめられ、吉田と上海へ。

(ところが、上海で入露旅費を渡すと約束した徳田球一は、すでに資金を受け取って帰国しており、仕方なく山鹿は同志らと交流。「大同党」「AF」などに、唯一の日本人アナキストとして加盟したりしながら、黄凌霜が日本経由で渡米するのに同行して、10月に帰国する)

▼ 同年11月。大杉のアナキスト・インター大会へ出席のため、中国での旅券入手工作を引きうけ、朝鮮を経由、天津―北京―上海へ。

(北京でエロシエンコと再会)

▼ 一九二三年(大12) 31才。1月5日 上海で渡仏する大杉の船を見送り、9日東京着。10日長女誕生。アイノ(Aino)と名付ける。

▼ 同年9月。関東大震災。千住の貧民街にうつり住み、にわか大工となる。大杉・野枝ら震災のどさくさにまぎれ、憲兵隊に虐殺される。

(大杉の虐殺について、モスクワはサカエ・大杉と利彦・サカイとを間違え、追悼文までつけて発表したが、大杉がアナキストと判って、大杉スパイ説のデマを流した。山鹿は詳細を海外同志へ送りつけて、その誤報を暴露。米・仏・独・伊・蘭・スペイン・スイス・スエーデン・ノルウェー・ポルトガル・メキシコなどで抗議の行動が起って、日本大使館や各

国共産党をあわてさせた)

▼ 一九二四年(大13) 32才。9月 和田久太郎・村木源次郎らの福田大將(震災時の戒厳指令官)狙撃事件関係で、千住の隠れ家に踏み込まれる。知らぬ存ぜぬで29日間拘留。以降公然化活動。

▼ 一九二五年(大14) 33才。第6回メーデーにアナキスト自由連合派を代表し、副司令者をつとめる。参加者二万。

▼ 同年9月。(日・エス・支・英会話と辞書)(B6 一一六頁一円)を岸上大道社より刊行。

▼ 一九二七年(昭和2) 35才。3月 「汎太平洋労働組合会議」へ自連派代表派遣を提案。送り出す。

(この会議は共産党の策謀で、一方的な宣伝に終始利用された為、代表帰国後の報告で紛糾し、山鹿も非難をうける。これが発端で純正アナ派のサンジカリズム派攻撃がはじまり、二年後にアナ系労働運動は「自連」と「自協」に分裂する)

▼ 同年8月。上海国立労働大学エス語講師として招かれ、石川三四郎・岩佐作太郎と共に渡支、12月帰国。

▼ 一九二八年(昭3) 36才。37才。京都点林堂経営不振で負債整理のため売却。勤務先アドバタイザー社焼失により失業。加えて運動内の紛糾・分裂などから離京。紀伊長島の実践女学校生産学園エス語講師になったが、すぐ廃校となり、京都のアナキストシンパ

進々堂パン屋の北白川支店を預って、バーテンダーになる。

7 小金井時代

▼ 一九三一年(昭6) 39才。4月 京都を引揚げ、点林堂整理分配金二千五百円でたてた東京郊外小金井の新居に落着く。芝浦の単式印刷に就職。39才。

(点林堂処分の金を受けとったとき、「お前はいつどうなるか判らぬから、残された妻子のため、必ず土地と家を買う」という条件が兄姉から出て、山鹿も納得した。

『当時、土地は新聞広告にいくらでも出ていた。だい分遠いが中央線小金井駅から5分ほどの栗林のなかの、家を壊した跡地が一七〇坪で千円だった。よい水がでる井戸があり、地境に杉の太木が十数本、梅の老木や竹林もあった。妻の兄が大工で、古材木を買ったりして、千円で家を建ててくれた』)

▼ 一九三六年(昭11) 44才。7月 スペイン革命戦争勃発。在パリCNT・FAI事務所と連絡・支援連絡センター日本責任者として活動。

▼ 一九三七年(昭12) 45才。4月 SAT創立者ランティ来日。

(SAT発行エッセス大辞典 Plena Vortaro の縮刷版が、単式印刷で安価にできること、具体的な印刷発行の話が成立したが、ランティからの送金なく中絶した)

- ▼ 一九三九年（昭14）49才。3月 「世界語老子」完成。山鹿流筆記体で清書したものを写真版にとり、単式印刷のオフセットで印刷、製本、自家版百部を発行。
- ▼ 同年6月。スペイン人民戦線支援活動によって検挙される。

—この小金井時代は、みるみる日本が軍国化し、戦時体制が強化される一方、運動が殆ど沈黙し終息させられるなかで、山鹿が家や土地、家財のすべてを売り払って、「日本脱出」のため日本の最南端台湾高雄へ、一家全員が移住するまでの八年間—ということになるが、一面では山鹿がもっとも山鹿らしい自分の生き方を発見し、家族たちと団欒をたのしむというかたちでの、アナキスト生活をつくったときともいえる。

たとえば丁度学齢期になった二人の子供を同伴者として、アヒルを飼い、薬草園をつくり、縄文土器を畑で採集し、その展覧会をやり、望遠鏡をつくって天体観測をし、立体写真を工夫し、紙ヒコーキの折り方を発明するなど。そしてもう一つがエスペラントのいろんな活動だったのはいうまでもない。

そのなかでとくに力を入れたのが、山鹿にとって長年の宿題だった「老子エス訳」の完成だった。そして小金井から芝浦までの車中、毎日通勤の往復4時間をほとんどエス訳推敲にあて、改稿をくりかえしながらおよそ五年ほどかかって、ようやく完成稿をまとめたのだった—

8 戦中・戦後

- ▼ 一九三九年（昭14）47才。9月 小金井の土地家屋家財の一切を売却。かねてから計画していた「日本脱出」の第一歩として、台湾高雄に一家をあげて移住。
- ▼ 一九四二年（昭17）50才。台湾で徴用され、フィリピンのマニラ日々新聞配属。
- ▼ 一九四四年（昭19）52才。戦況不利。台湾へ帰り、連温郷らの援助で台中州の山間に疎開。
- ▼ 一九四五年（昭20）53才。日本降伏。高雄で「台湾自由社」の看板をかかげ、塾をはじめる。
- ▼ 一九四六年（昭21）54才。4月 生活できず帰国。京都・便利堂印刷につとめだす。発した日本アナキスト連盟に参加。機関誌平民新聞京都支局を引受ける。
- ▼ 一九五四年（昭29）62才。2月 市川市中山へ移転。アナ連、国際部を担当。エス版国際ニュースを発行。戦争抵抗者インスター（WRI）に加盟。
- ▼ 一九五六年（昭31）64才。日本エスペラント運動50年大会で表彰される。
- ▼ 一九五七年（昭32）65才。亡命スペイン人（在ベネズエラ）ロシア来日。同行して西日本の同志たちを約50日歴訪行脚。
- ▼ 一九六〇年（昭35）68才。インドで開かれたWRI国際大会に出席。平和運動功労者として表彰をうける。

▼ 一九六一年（昭36）69才。12月 脳出血で倒れ、左半身不随状態。

▼ 一九六二年（昭37）70才。「老子直解」上下二巻刊行される。

（エス訳抜きで「老子」の訓み下し和文と脚注を抄出したもの。神戸PBK文庫発行。B6ガリ版）

▼ 同年8月。スペイン語訳老子「*La Voie*」がメキシコ「土地と自由社」から刊行。

（この「スペイン語老子」は、57年に来日したグラシアが、山鹿の話をきいてぜひスペイン語でも出したいと申し出て預った、改定新訳のエス語老子の原稿コピーが、もともになっている。

10 cm×15 cm、一一七頁の少冊子ながら、翻訳者は在カナダ・トロントのE・ヴィヴァンコススペイン革命戦争で勇名をさせた闘士―、前文にグラシアの、安藤昌益にはじまる日本のアナキズムの運動史と、山鹿の生涯についての紹介が36頁も費やしてかれ、アナキズム歴史叢書の一冊としての刊行である）

▼ 一九六六年（昭41）74才。62年病床でかきはじめた回想手記『たそがれ日記』全92篇、そのあとつづかず終る。絶筆は、「エスペランティスト由比忠之進の焼身自殺について」―自由連合12月1日号掲載。

▼ 一九七〇年（昭45）12月6日。永眠。78才。

9 「エス訳老子」補遺

やりはじめると集中して、何にしても仕上げが手とりばやかった山鹿にしては、「エス訳老子」は随分年月がかかっている。獄中の発起からかぞえて18年目、一九三九年にようやく「世界語老子 *Maljuna Majstro*」をとりあえず自家版として発行したが、それも―数年まえから彼の計画した「日本脱出」の時期が、状況的に切迫しており（事実、その半年後にそれは実行される）―それまでに何とか形としてエス訳を完成して遺しておきたいということでの、ともかくの一段落だった、と思われる。

山鹿の死後、その身辺にあった図書類を整理した際、雑多な未定稿原稿やメモ、ノートの中から発見された「エス訳老子関係」十数点のなかには、コピーに改めて手を入れたもの数種、清書した完稿にさらに手を入れたものが数種あり、ただ一冊のみ手元に現存しているそれらの原本となった39年版「世界語老子」に至っては、綴じがばらばらになるほど傷んで、余白は書き込みと改訂でびっしりと埋められている。

たとえば、第一章の冒頭部分での、改訂稿の異同だけでも山鹿の苦心した推敲の足どりをみることができるだろう。

★ 1939年— *La vojo kiu estas esprimblela kiel la vojo ne estas ciam vojo.*

★ 1957年— *La vojo esprimblela ne estas ciam-vojo.*

★ 1962年— *La vojo, kiu estas esprimblela, ne estas porciama vojo.*

このように何度も改稿がされた理由として、語学的な翻訳技術の点もさりながら、何よりも原文の難解——というよりも、老子は詩のように韻を踏んだ中国の古文で、簡潔直截、多くある注釈書もその数だけ解釈がそれぞれ異なり、しかもそのいずれも、老子のいうところを俗解、歪曲していて、山鹿にはとてもなっとく出来ないということがあった。

そのうえ、エス訳にとりかかってみて改めて判ったことだが、訳するとなると一字一句をあいまいにしたままの、感じだけでは訳せない。何よりもまずエス訳の前に、学者によって異なるある「老子」原本の正しい「和訓読み」を確定する必要があることだった。たとえば各本の訓読み（第一章）を比較すると、

★岡田氏——道ノ道タルベキハ、カワラザルノ道ニ非ズ。

★諸橋氏——道ノ道トスベキハ常ノ道ニアラズ。

★井上氏——道ノイウベキハ常道ニアラズ。

☆ ☆ ☆

山鹿の自序に『古来、老子を記注したものは多いが、多くは第一章の冒頭から誤訳誤解されている。わが師井上秀天はその著「老子の新研究」によって多くの異本を対照し：誤訳を指摘した』そして、『秀天の見解を最も正しいものと信じて、それを基本として用いた』とあるように、まさに「老子の新研究」は、山鹿が求めていたもので、たまたま古本屋で入手

したものだった。

早速、秀天との手紙のやりとりによる質疑がはじまり、また神戸熊野の居宅をも数回たずねていつて教えを親しくうける——ということ、ようやくエス訳が進むことになったのである。

なお秀天については殆ど知られていないが、一九〇八年ごろ神戸で、小松丑吉・岡林寅松らが中心になってつくられていた「平民倶楽部」のメンバーで、そのニュースに論文などもかいていたといわれる。一〇年の幸徳大逆事件で小松、岡林が逮捕され、無期懲役として連座したとき、秀天も逮捕されきびしい追及をうけた。関西学院大学の教師だったということもあってまもなく釈放されたが、その後は要視察人としてながく警察の監視下にあったらしい。

仏教研究の英学者として「碧巖録」などの英訳書もあり、海外でも知られる業績をのこしたにもかかわらず、野に在って生涯不遇だった。それにしてもおそらく山鹿も秀天も互いにそのような経歴を知らず、ただ「老子」を通じて一時期師弟の縁を結んだことは、奇しき縁というほかない。

付記 — おわりに —

本書は、今年97才の山鹿ミカさん（―二〇三時間話を伺っても平気で、お声も明るく記憶もとても明晰である）と、長女の瀬川アイノさん（有志が整理してつくった山鹿文庫―沼津市内浦三津五四―を瀬川一家とともに守っておられる）のお二人から、刊行の相談をうけ、向井孝とタニ・ヒロユキ、藤巻謙一が具体化（協力タニヒロユキ）したものである。

昨年夏、伊藤ルイさん（大杉の四女）が病床を見舞って、ミカさんと初体面したあとで、「私の母の野枝も、もし生きていたら、このくらいの年かと」と洩らされたが、ぼくにはどきんとするほどの「歴史」を思いだす出すことばだった。

一九二二年11月末、山鹿は大杉の依頼で、大杉が渡仏する旅券入手工作のため、臨月のミカを残して渡支した。その留守中、二つ年長の野枝は、初めてのお産で心細いミカを案じて、何度も訪ねてきて世話をした。そのころ珍しかったおむつカバーやおむつをそろえてくれた。明けて二三年1月9日、山鹿は上海で大杉を見送って帰国、それを待っていたように1月10日、長女アイノが誕生したのだった。いま山鹿文庫にのこる一枚の写真の―ミカに抱かれている丸々した赤ん坊アイノがかぶっている、フリルのついた白いベビー帽は―はからずもその九ヵ月後に、大杉・宗一少年と共に無念の死を迎える野枝の、アイノへと贈った小さな形見となるものだった。

最後に、ことし一九九二年は山鹿泰治の生誕百年、没して早くも二二年目にあたる。その

記念の意味をもふくめ、故人にとっては生涯の課題であった「エス訳老子」を、改めて世に送り出せたことを何よりの喜びとしたい。

― 向井孝 ―